

聖書:ダニエル書10章1～14節

説教:終わりの日にあなたの民に起こること

はじめに

紀元前605年、ダニエルはバビロンの軍隊がエルサレム神殿神の宮の器を持ち去り、徹底的に破壊するのを見て衝撃を受けるとともに、自分自身もバビロンに連れて行かれます。それ以来、異国の地でずっと祈っていたことは、破壊された神殿のことです。あのまま神殿が崩れ落ちたままでよいはずはない。主よ、必ず神殿を再建してください。そのように祈り続ける。しかしどんなに祈ってもなんの手ごたえがないまま年を重ね、八十歳を迎えたころ、預言者エレミヤがバビロンに住むユダヤ人宛に書いた手紙を手に入れる。そこにはこう書かれていた。「バビロンに七十年が満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたをこの場所に帰らせる。あなたがたがわたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに耳を傾ける。」(エレミヤ29章10, 12節)

これを読んでダニエルが自分の罪と同胞のユダヤ人の罪のために祈っていると、御使いガブリエルがすぐにやって来て、神の救いのご計画を語り始めた。それが9章までのあらすじで、今日はその続きです。

## 1 喪に服す

### 1) 亡くなったのは誰か

1節に「ペルシャ王キュロスの第三年」とあります。これにはいろいろ説があるようですが、おそらく紀元前535年頃のことだろうと考えられています。そのときダニエルに何が起きたのかを見てまいります。

2節に、「そのころ、わたしダニエルは、三週間の喪に服していた」とあり、続く3節には、ごちそうも食べず、行くもぶどう酒も口にせずと書かれていて、これは身近な家族が亡くなったときの喪の服し方だと言われます。おそらくダニエルの奥さん、または子どもが亡くなったものと想像されます。ところでダニエル書は、ユダヤ人の信仰のために書かれたものなのです。当然のことですが直接信仰とは関係がないことは触れません。これまでダニエルの私生活について何も書かれていなかったのはそのためです。ところがこの箇所だけに彼の家族のことがでてくる。あえて書くのですから何か訳がある。

## 2) 自らを戒めようとした

どんな訳があるのか。そのヒントは12節にあります。ダニエルの前に現れた一人の人物はこう語ります。「あなたが心を定めて、悟りを得ようとし、自分の神の前で自らを戒めようとしたその最初の日から、あなたのことばは聞かれている。私に来たのは、あなたのことばのためだ。」

「自らを戒めようとしたその最初の日」とは、おそらくダニエルが大切な家族を亡くした日のことだろうと思われまゝ。彼は若いときは、何があっても揺るがない、日に三度の祈りを欠かさない立派な信仰者という自信があった。しかし年齢を重ねて体力が衰え、家族を失うようなことが起きてくると、それまでの自信を失い、足元がぐらぐらと揺さぶられてしまった。今風の言い方をすれば、老年の危機を迎えたと言うことでしょうか。それで彼は主にすがるようにして、自ら戒めようと祈るのです。

## 2 幻

### 1) 主

その祈りに対する応答は、まったく思いがけないときに与えられます。同行の人たちとともにティグリス川のほとりを訪れていたとき、亜麻布をまとい、腰にウファズの金の帯をしている一人の人が幻の中に突然現れます。ウファズとは金の産地、あるいは金の製法、いろいろ説はあるのですが詳しいことはわかっていません。とにかく、ダニエルがこの幻を見てあまりの恐ろしさに体から力が抜けて、意識を失ってしまいます。

幻に現れたこの人物が誰であるかについて、ある人は「御使いであろう」と言っております。本当にそうか。例えば黙示録1章には似たような場面が出て来ます。ヨハネが燭台の真ん中に立つ人の子のような方、主リストを見たとき、その姿は、「足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締め、その目は燃える炎のよう。その足は、炉で精錬された、光り輝く真鍮のようで、その声は大水のどろきのようなであった」と書いている。ダニエルが見た姿と比べるとよく似ています。それだけではない。16節でダニエルは自分に触れてくださった方に対して「わが主」言って、相手はそれを否定していない。ですので、幻に現れた方は主であると考えて間違いはないでしょう。

## 2) 立ち上がれ

その方がダニエルに触れながらこう語ります。  
11節。「特別に愛されている人ダニエルよ、私が今から語ることばをよく理解せよ。そこに立ち上がれ。私は今、あなたに遣わされたのだ。」

ダニエルが「特別に愛されている」と言われる理由については前回触れました。彼がいつも日に三度の祈りを欠かさない立派な信仰者だから、ではなかった。むしろ、神の前に自分はこれまで正しい人間だと信じ、同胞のユダヤ人のために祈ろうとせず、むしろ彼らは自分とは関係のない罪人であると決めつけてきたのです。その傲慢さを示されて、彼が自分の罪と同胞の罪のために祈ったとき、彼は特別に愛されていると言われました。ここでも同じです。その彼に、主は14節でこう語ります。「私は、終わりの日にあなたの民に起こることを分らせるために来た。その日は来るべき日を待たなくてはならないが。」

## 3 あなたの民に起こること

### 1) あなたの民

主がダニエルに対して「あなたの民」と語っていることに目を留めます。今も言ったように、ダニエルはかつて他のユダヤ人を自分の仲間である同胞であるとは思っていませんでした。でも、エレミヤの手紙を読んだで、9章5節でこう祈っていく。

「私たちは罪ある者で不義をなし、悪を行って逆らい、あなたの命令と定めから外れました。」

「私たち」とダニエルが祈った。それを受けて、主はダニエルに「あなたの民」と語ります。でもどうして「あなたの民」とわざわざ言われるのか。

「私は、終わりの日にあなたがたに起こることを分らせるために来た。」これでも十分伝わるはずですが、それなのに、どうして「あなたの民」なのか。

イエス・キリストと関係しているのではないのでしょうか。この方は神のひとり子でありながら人の姿となられ、罪のない方であるのに罪を背負われて、私たちと同じ弱い姿になられ、同じ所に立ってください、私たちをご覧になって「わたしの民」と呼んでくださる。ダニエルが特別に愛されている者と呼ばれるもう一つの理由は、ここにあるように思います。ダニエルは自分が犯してきた罪と同胞の罪は同じであると示され、「私たちは」と祈る。実はそれはイエス・キリストがなさることでもあった。「あなたの民」、何気ない一言です

が、このことばの中にも主ご自身の御思いが凝縮されていることに気付きます。

### 2) 終わりの日のことを教えられる

では最後に考えます。主はなぜダニエルに終わりの日にあなたの民に起こることを分らせるためにと言って、わざわざ来たのか。そのヒントは、ペルシャの王キュロスの第三年というところにあります。実を言うと三年前のBC538年に、ユダヤ人が故国イスラエルに帰ることが許されているのです。ところがそれから間もなく、ダニエルは愛する家族を失ってしまう。加えて、自分は高齢になってしまい故国に帰る体力はありません。それまでは、どんなことがあっても信仰に関しては何も揺るがされない。そんな自信があったはずなのに、なにか足元が崩れていくような不安に襲われるのです。

そんなダニエルに主ご自身が現れてくださって、終わりの日のことを告げようとされる。なぜそうするのか。わかりやすくするために反対のことを考えてみらどうでしょうか。もし終わりの日について主が何も語ってくださらなかったとしましょう。私たちの目に、この世界は悪い者たちが自分の力を誇り、正義をねじ曲げていく、そんなことがたくさん起きていくように見えます。また、年を重ねるうちに親しい家族や愛する者に先立たれ、ひとりぼっちになっていく。そうしたら、だれもが思います。この先どうなるのか。私はどうなるのか。このままではゴールは見えません。ただ途方に暮れて、絶望するしかありません。

でももし主が終わりの日に起こることを語ってくださるのならどうでしょう。あなたは愛する者を失い、あなた自身も弱くなって希望を失いかけたとしても、あなた気落ちする必要がない。その証拠として、エレミヤを通して語られたように、主がキュロス王の心に働き、バビロンに連れて来られたイスラエルの民を戻す、それが実現したのをあなたは見たではないか。今も主は最前線に立って御使いミカエルとともに戦っている。そしてこの先も、主はこの世界を支配し続け、終わりの時、永遠の義が完全に打ち立てられていく。あなたはそのような世界を歩んでいるのだ。あなたはそのゴールに向かって歩んでいる。だからあなたは例え愛する者を失っても恐れることはない。立ち上がりなさい。たとえ気落ちすることがあっても、主があなたに手を差し伸べて触れてくださり、力を与えてくださる。あなたの人生は、主とともにあるのだから、起き上がりなさい。

私たちの人生は、そのように励ましてくださる主  
とともにあることを覚えます。